

教育活動における市民性教材に関する研究

—モンゴルにおける初等教育市民性教育用教材の試作を通じて—

バイスガラン・オユンツェツェグ*
(Bayasgalan Oyuntsetseg)

1. 研究背景と目的

近年、アジア諸国で市民参加型社会の創造が志向される中、各国で市民性教育の重要性が教育課題として取り上げられてきている。市民性教育に期待されるものは、「一国の担い手」としての国民を育てるという側面だけではない。国家や地域の共同社会の形成者をいかなる内容と指導方法を持って育成するか、といった新しい視点にたった枠組みや内容を構築することが課題となっている。

モンゴルでも経済的台頭に伴う社会の多様化・複雑化への対応として、共有すべき市民的価値の教育が強調され、2005年からナショナル・スタンダード¹⁾に「主体的に社会に参画する積極性と健全な批判精神、コミュニケーション能力、思考力、表現力、問題解決能力」を養うことを学習目標とした「総合的な学習」²⁾、「市民性教育」³⁾が導入され、現代社会が直面している様々な課題を解決していくといった学びのあり方が模索されている。このような学習目標達成のために、市民性教育において新しい学びのスタイルが必要となっている。それは、現在の教育において行われがちな教師による一方的な講義スタイルの授業ではなく、学び手が主体となる参加型学習である。上記の学習目標を踏まえた上

で、具体的なカリキュラムは、各学校が様々な観点から地域や学校の特色を活かした独自のアプローチや進め方を模索し、制定することが可能になっている。

モンゴルにおける市民性教育の学習目標の視点が、積極的な社会参加を促す韓国の「特別活動」、自ら学び自ら考える力や能力の育成を目標とする日本の「総合的な学習」、生徒の主体性、創造性の発揮を目標とする中国の「特別活動」と類似した性格をもっており、東アジア諸国の市民性教育は「社会的価値観を共有し、日常生活の様々な問題や地域の課題に対する解決策を模索・実行し、より良い社会を創り、運営するための学び」として共通性がみられた。また、これらの国で「普遍的な価値観を基盤とした自己成長」を「社会創造」と融合して捉えている観点も共通している。

しかしながら、モンゴルで具体的な学習内容の設定やそれを実現させるための教材の不足など多くの課題がある。具体的には、以下の三つの課題を挙げることができる。第一に、近年、社会体制の改革と価値観の多様化に伴い、青少年の公共心や規範意識の希薄が議論される中、市民性教育の重要性が急激に上昇しているものの、その在り方を展望する学問的研究の分析視角が看過されているこ

*モンゴル：モンゴル国立大学講師、日本大学文理学部人文科学研究所研究員

と、第二に、「国家や行政組織、法制度などの政治概念の学習や、社会におけるその保障」というような「政治に参加する実践力」の視点が強調されるあまり、学習内容の問題をめぐる理論的な説明が混迷に陥ってしまい、市民性教育への批判的眼差しが注がれていること、第三に、市民性教育の効果に対する全社会的注目が高まる一方、筆請者のこれまでの研究で注目された「浅い読解的な指導」や「一方的な教え込み」、「指導課程の形骸化」等が批判され、単発的で行事的なイベントを中心としたプログラムと多く、市民性教育指導方法全般に対して、現状分析を行う必要性が生じていることが挙げられる。

したがって、本研究では、モンゴルの市民性教育の実態を明確にするために、市民性教育関連教科や社会系教科の教材⁴⁾の特徴について検討した。そして、社会系教科で実際に活用されている教材と指導方法の特徴について分析し、新しい教材の開発を試みた。以下、研究内容について、まとめる。

2. モンゴルの市民性教材の特徴

(1) 社会科系教科と市民性教育との関連

ここで、モンゴルの市民性教育の代表的な教材として、社会科系教科の教科書を分析したい。モンゴルの社会科系教科は、社会生活の仕組みや社会生活で守るべき法令や正しい行為に関する知識を教授し、社会認識を通じて市民的資質を育成することを目標としている。つまり社会の一員としての望ましい人間の育成が目指されているのである。

では、この望ましい人間とは、どのような人間であるのか。これは、教育スタンダードで示したとおり、社会の変化に対応し、主体的に生活できる能力を持つとともに、豊かな社会性を持っている人間ということである。

モンゴルでは、今日までこれらの能力や資質を育成するために、社会科系教科で道徳的価値に関する項目を含んだ学習内容を構成し再編するなど、様々な試みが行われてきた。他者を思いやる心、互いに認め合い支えあって生きる態度、自他の生命や人権を大事にする心、社会生活上の秩序やルールを尊重する心を育てることなどは、内容的にも社会科系教科とのかかわりが強い。こうした観点から、社会科系教科の担う責任は極めて重いとわなければならない。今後も、こうした方向は基本的には続くものと考えられる。このような考え方に立ち、モンゴルにおける市民性教育の授業実践を分析するために、まず、その前提として、社会科系教科の特徴を解明する必要がある。従って、以下、社会科系教科の展開と内容についてまとめてみる。

(2) 社会科系教科の展開とその内容

社会科は、二つの時代（社会主義と民主主義）を経、且つ社会の大きな荒波を受けながら何回もの改訂を繰り返しながら今日に至る比較的歴史の長い教科であり、今日まで国の体制基幹をなす社会主義を根づかせるために大きく寄与すべく、一定の役割を果たしてきた。また、この間社会科の実践も着実に発展してきた。

1980年代末から始まった国内民主化に伴う社会主義体制改革後、モンゴルでは、社会科系教科書の大幅な改定が必要となった。加えて社会科諸科目の場合は、全面的な書き換えが必要であり、他教科との様相を異にした。従来のマルクス・レーニン主義的唯物論、発展段階説を絶対視し、イデオロギー的色彩の強い内容になっていた教科書を改訂する作業は、簡単なものではなかった。また、学校の教師たちの再教育も同時に行い、新しい考え方を浸透させなければならなかった。

1991年から「社会科」は、「社会認識」という名称のもと、年間96時間の新カリキュラムと内容により実施されるに至っている。1992年の「歴史科」および「社会認識」のカリキュラムによれば、これらの授業は、「生徒が前学年で習得した知識をまとめて整理し、その知識を用いて個人の人生および社会・政治制度を理解・分析し、さらに、個人の生活や社会的立場を明確にする手助けとなる」という目的のもとに行われた。

「この点は、従来の社会科の目標と大きく異なる点である。生徒がもつ知識のあり方が根本的に変わったのである⁵⁾。つまり、以前の「社会科」では、共産主義的世界観および信念を植えつけるのに必要な知識を与えていたが、「社会認識」では社会の仕組み（生活）を理解し、自己の社会的立場を明確にするのに役立つ知識を与えることを重視するようになったということである。

「社会認識」の内容には、人間の本質、哲学の起源、哲学の基本概念、世界観、社会生活の仕組み（政治、経済など）やその構造および役割、さらには発展と改革に関するテーマも含まれていた。即ち、新しく構築された概念とともに、従来の社会科に用いられていた概念も併せ持つようなカリキュラムに再編されたのである。例えば、「哲学は、世界観を学習する手段である」という命題は、社会は物質運動の最高の存在形態であるとする弁証法的唯物論の基本概念について説明しているが、その哲学的根拠は社会的および史的唯物論に基づいて解釈されている。そのほか、「社会および経済制度の基本問題」というテーマでは、マルクス・レーニン主義経済理論と現代の市場経済政策論の双方が書かれている。これは、マルクス・レーニン主義、社会主義制度、社会主義的国際主義、社会諸国友好関係など、それまで目指されていた目標

や重要な社会的価値観が揺らぎ、結果、基本とされていた思想が極端に変化し、新しい民主的社会の価値観が十分に定着し得なかったという移行期の混沌とした社会情勢を物語っているものともいえる。

このように、暫定的な性格を持ったカリキュラムではあったが、社会科の授業内容および教授法を改革する上でそれなりの役割を果たしたことは否定できない。さらに、この授業での目的は、人間およびその生物学・社会学の本質、人間の才能、開発、教育、社会的責任など、30近くの概念⁶⁾を教授し、多様な能力⁷⁾を涵養することであった。なお、生徒が習得すべきこれらの能力は、従来の社会科で教えていた能力とは大きく異なっている。例えば、

- ①「社会科」では、社会現象を評価する際に、理論的知識、政党（人民革命党）的な立場で考察する能力を養うことを重視していたが、「社会認識」では、社会現象を評価する際に、理論的知識、科学的研究方法を活用し、歴史的観点から考察し、自己の意見を主張する能力を重視することになった。
- ②「社会科」では、社会主義国の問題解決に貢献できる人間の育成を重視していたが、「社会認識」では、社会および国民の課題を実施する方法を明確にできるような人間育成を目的とした。
- ③「社会科」では、マルクス・レーニン主義の文書、ソ連共産党、モンゴル人民革命党の資料を主な参考文献として活用していたが、「社会認識」では、多様な情報源を活用することになった。

1995年には、「社会認識」のカリキュラムが再改革された。新しいカリキュラムでは、1992年以降の従来のカリキュラムでの目的および内容が基本的に維持されたものの、生

徒の社会活動への積極的な参加を促進する新目的が掲げられた⁸⁾。

即ち、「練習、会話」の時間を別途 18 時間設けたのである。この時間の中で、社会認識の授業で修得した知識を深めるために、会話、討議、実習、発表、感想文などをはじめ、社会の実態を観察し、社会生活に積極的に参加するための学習が行われたのである。また、「社会認識」では、「意見の多様性」、「民主主義」という概念のほか、「失業」、「貧困」などの社会問題についても教育が行われた⁹⁾。

2001 年から法律の教育が重要視され、3 学年に「私たちの規則」、4 学年に「私たちの権利と義務」、5 学年に「法律とは何か」、6 学年に「人間の権利」、7 学年に「国家の法律」、8 学年に「法律と私たちの生活」がそれぞれ新設された。その基本的内容は国民の必然的かつ基本的権利を実生活で享受し定着させる習慣、国家の主要な権利に関する概念、国家行政組織、立法機関、自由選挙についてである。基本的人権の中で従来モンゴル人民共和国において保障されていなかった個人の思想、信条、言論の自由に関する人権について新しい概念がはじめて教授された。

指導方法については「法律に関する基本概念を生徒との会話形式で解説し、法律に関する概念を生徒に押しつけることを避け、生徒自身の経験、個人および社会の法律関係に関する事例を創造的に活用するため、授業で会話や討議の時間を設けている¹⁰⁾。

ただし、その指導方法には問題もあったといえる。例えば、道徳的価値や社会で守るべき規範は「法令で規定されているから守らなければいけない」というような内容がたくさん含まれていた。そのため、この教科で教える市民性教育も表面的なものになりかねない状況にあったといえる。つまり、基本的な生

活習慣の形成・定着に関する項目はほとんどなく「法令に従うべき義務とその理由」、「社会で守るべき法令」、「学校の規則」、「子どもの権利」などを教えていた。このように、法を通じて人間のあるべき姿を法に重ねて理解させ、法の本質を教授し、これを実践する力を養うことを重視しているが、「社会のしくみ」や「法の規定」を中心とした知識を教授するに留まっていた。

社会で守るべき模範や人間関係は法律を中心に解説されており、会話の時間も与えられた質問に対して法律と関連させながら事例¹¹⁾を解釈する時間だけになっていた。この教科は上の学年になると法律の専門用語が増え、民法、労働法、社会保障法、資産所有法などの法律の概念について教える内容になっている。

2004～2005 年度にかけて導入されたナショナル・スタンダードに基づき、自然を大事にし、子どもの時から健康的に生活できる習慣を身につけるように指導する教科、または、人間の行動の善悪の判断に関する領域を設けた教科が創設された。「人間と社会」(хүн нийгэм) (4～5 年生)、「社会性」(иргэншил) (6～9 年生)、「健康」(эрүүл мэнд) (4～11 年生)、「人間と環境」(хүн орчин) (1～3 年生)¹²⁾などの教科である(それぞれの学習内容については、注記を参照)。

これらの社会科系教科は、①社会についての知識の強化、②社会生活で守るべき法令、社会に参加できる能力の育成、③家庭・社会の中での正しい行動の形成をねらいとし、それを「社会に関する認識」、「道徳律」、「法令・規則」、「人間関係」、「権利・義務」などの領域に分けて扱うことにしている。

なお、本研究で取り上げる教科書は、教科書検定制度のもとで主たる教材として位置づ

けられ、全国共通版として活用されているものである。その細かな内容を見てみると、明らかに、この領域の内容が道徳的価値の学習を中心に構成されていることが分かる。教科書の目次にも、徳目がそのまま、並べられて提唱されている。

教科書を開いて見ると、小学校の教科書は解説や絵が豊富で、簡明で分かりやすい内容になりつつある。学年が進むにつれて、中学校の教科書は内容が深まるとともに、生徒を意図的に葛藤させようとする事例などが用いられている。また、文章の量が増え、挿絵はほとんどない。一課一課の徳目の内容をみると、全体的に、小中学校の教科書に、説明・解説文のほか、徳目ごとにいくつかの設問が設けられている。

なお、社会科系教科で教授する市民性教育の領域を、次のようにまとめることができる。

- ① 人間と自然との関係
- ② 人間と社会との関係、社会集団との関係
- ③ 人間と自己自身との関係

ここから、自然と人間、または人間と社会との関係、そして人間と人間との関係においても、根本的には、道徳がベースになるという考え方が伺える。

最後に、社会科系教科の教科書の特徴として、3点挙げてみる。

- ① 徳的価値に関する説明（定義）、質問、宿題（作文・事例作成）という3つの項目から構成されている。
- ② 討論式授業が目指され、「討論しなさい」、「話し合いなさい」といった欄が多く設けられている。
- ③ 生徒が自ら道徳性を育むことができるように、各単元の最後に、「新たな事例を考えて作成しなさい」といった欄

が多く設けられている。

また、各単元の道徳的内容をみると3視点で認められる。まず、「私たちの関係」、「私の生活環境」などの領域の中で、自分自身についての理解を深めるという点である。自分の好きなものや嫌いなもの、自分のできるものやできないものについてわかるような指導が配慮されている。次に、子どもの最も身近な家族の関係や家族を尊敬する意味について、そして最後には、学校、社会、地域についてというように広がりを持たせながら教授することになっているのである。これらの教科書を、上述した、従来の「社会認識」や「法律」などの教科書と比較してみると、倫理学、法律などに関する学術的知識から、より子どもの生活に沿った道徳的価値を喚起しようとする指導に転換しようとしていることが伺える。それに伴い、指導方法についても、「価値の教え込み」から、参加型学習を促す指導方法が導入され、「討論」や「話し合い」の時間を設けるなどして、学習者自身が望ましいと考える価値を能動的に選択し、決定できるように指導していこうとしていることが伺える。また、記述の特徴としては、道徳的価値が抽象的に定義され、それにつづけて、具体例が示され、討論・事例作成などの課題が示されていることが挙げられる。次に、授業実践で使われている教材と指導方法の特徴についてまとめたい。

3. モンゴルの授業実践で使われている教材と指導方法の特徴

モンゴルの小学校¹³⁾の社会系授業を分析した。具体的には、「良い行動と悪い行動」(中1年)【社会性教科¹⁴⁾】、「謝罪は尊敬を表わすものである」(小4年)、「功労者(有名人から習おう)」(小4年)、「友情」(小4

年)、「お互いを理解する意味」(小4年)【人間と社会教科¹⁵⁾】、「人間関係の過ち」(小5年)【健康¹⁶⁾】、「人間関係」(小2年)【人間と社会教科】の授業を参観した。参観した授業は、モンゴルに見られる典型的なパターンの授業である。ここで、具体的には、どんな資料を用いて、どんな内容で、どのように授業が展開されているのか、指導方法がどのように工夫されているのかについて考察した。

参観した授業例をみると、言語主義教育で訓戒や説教の傾向が強く、道徳的価値に関する特定の知識を生徒に一方的に伝える知識重視型授業であると判断できる。たとえ、知識重視型授業で、生徒が道徳的価値に関する新たな知識や概念を教授されたとしても、生徒自らが価値を獲得したり、主体的に思考したり、判断する機会がどれほどあるのか。客観的理解の面に重点が置かれ、主体的な理解に結び付けようとする指導が手薄であるように見受けられる。このような考え方に立てば、①思考の単純化、②価値選択の自由の保障、③価値の多様な意味内容を吟味する機会、④生徒自身による価値の発見と内面化の機会がどうであろうか、といったことは今後検討されるべき課題である。たとえば、モンゴルの授業実践は、「作文・感想文」に時間をかけすぎて、生徒の主体的な学び合いや、生徒同士の話し合いの時間が確保されていないことがわかる。生徒にとって、教科書で課題として出された「作文・感想文」を書くだけでなく、見方や考え方を表出したり、また、他者の意見を聞いたりする交流の場がもっと確保されてよいように思われる。また、授業展開に合わせ、自他の意見の違いを明確にするなど、書くための視点を具体的に提示し、取り組ませる方法を工夫することも必要である。そして、「自分だったらどのような行為を選択し判断するのか」、「自分はどのように考えている

のか」という点に注目させ、生徒の考え方の吟味を促すような作文を課題とすることも必要であると思われる。これは、生徒に学習させる知識について、教える側がどう捉えるかということにも関わってくる課題でもある。以下、授業実践で使われている教材の特徴と指導方法について見えてきた特徴をまとめた。

(1) 教材については、次の5点を指摘できる。

①授業実践で活用される教材(教科書)から判断する限り、道徳的価値が最初からはっきりした定義で示されるため、児童生徒の善悪判断が単なる知識としての理解に留まってしまいがちな教材が多く、生徒が自ら価値を発見したり、感じ方や考え方を深めたりするような内容が十分盛り込まれているとは言い難い。このことは、社会科系教科だけでなく、教科学習全体の中で道徳教育を進めようとするとき、検討すべき問題をはらんでいるといえる。②失業や貧困など社会問題を扱うことや、人間の守るべき規範を遵法精神で説明する内容の教材が多い。③社会的価値観や規範に関する内容項目をことさら意識した教師主導型の教材が多い。理論的な色彩が強く、価値観の注入主義的指導がまだ残っており、生徒同士の学び合いより、学習事項の知識の確認という意味合いが大きかったのである。そのため、授業で取り上げられる道徳的価値が、知識のレベルで強調される。④生徒は教材の登場人物の気持ちを考えるより、第3者の立場からの教訓話になるケースが多い。また、教科書に登場する人の生き方や努力の様子を通じて、人としての生き方を学ばせる内容の教材も多い。そのため、授業で教科書に登場する出来事や人物について、細かな年号や人名などを覚えさせる。その半面、単元の中に含まれる道徳的な問題を生徒の身近な問

題として取り上げ、それを高次の実践に結び付けていけるような内容が少ない。⑤感性に訴え、豊かな感動を与えるような内容が少ない。これは、社会科系教科は、情緒より知識を目標としていることに関連している面があると思われる。生徒が教材に関心を持つことができるか、主体的に授業に参加できるかは、教材そのものに関わる場所が大きいという考え方に立てば、生徒自身の経験や考え方を求めるような課題を設定する教材の意義と性格について改めて検討する必要があることがわかった。

(2) 次に、指導方法の特徴については、次の7点を指摘できる。

①教師中心の指導方法の象徴とされる「教師の説明」がモンゴルで最も典型的な指導方法であり、教師と児童、あるいは児童同士の応答が少ないことが明確になった。その一方、子どもの関心や自発的学習を促すのに有効な方法であるとして「話し合い」活動が重要視され、多くの教材に「話し合いなさい・討論しなさい」といった課題が設定されていることが理解できた。ただし、ここでいう「話し合い」の意味は、筆者の参観した日本の授業実践でみられる「話し合い」と異なることが多い。児童生徒同士の対話を通じて共感を喚起し、開かれた自由な心で問題の意味を互いに考究していくという日本の授業実践に対し、モンゴルの授業では教師が質問し、児童生徒がそれに対し答えるといった一問一答形式になることが多い。②前もって教材の解説を行うことはほとんどない。単元名を板書し、直接教材から入る。その際に、ねらいとする価値が明確に提示される。そのため、生徒は直線的に価値に接近することが多く、その焦点は、ねらいとする価値に関する多量な知識を学習させることに合わせられる。③最

も多く用いられる指導方法は「作文・感想文」である。これは、社会系教科に「作文、感想文」を作る課題が多く設定されていることとも関連する。生徒が「作文・感想文」を書くことにより、自分の考えを客観的に見直す時間を確保する上では効果的である。また、教師にとって、「作文・感想文」は生徒の考え方や感じ方などを追跡し、彼らが授業で学んだことを評価する手掛かりともなっている。生徒にとっても、「作文・感想文」は、自分の考え方や感じ方を明確にしたり、じっくり考えたりする上で効果的であろう。だが、実際の授業を見ると「作文・感想文」は、学習評価（教師にみてもらい点数をつけてもらう）のためによく用いられている。また、多くの場合、「登場人物はどうするのか」という課題が設定されているので、主人公の価値判断を予測するだけの作文になりかねないことが伺える。④その一方、課題として教科書の事例に習い、新たな事例を作成させる方法がよく用いられる。教科書で示す内容の範囲だけではなく、他の場面のことも関連させて考えさせるような指導方法が試みられていることが伺える。⑤教科書には「討論・話し合いなさい」という課題が多く設けられているが、実際には、教師が質問をし、生徒がそれに答えるだけで、オープンな対話活動や生徒同士の話し合いの機会は少ない。授業で学んだ感想や理解したことを授業の終わりに書かせることが多く、友達同士の学び合いというよりは、自己の行動を振り返らせることを中心としている。言い換えれば、学習事項の知識の確認という意味合いが大きい。⑥教科書以外の教材は活用されない。指導はすべて教科書中心で進められている。教科書を生徒に読ませ、教科書の質問に答えさせ、確認を行い、教科書の粗筋を表面的に追うやり方が多い。そのため、授業は主に教科書の質問を

生徒が一人で埋めていく形で展開されることが多い。ノートへの記述が多い半面、書いたものを発表し合う時間は確保されていない。⑦一部の学校で、生徒の主体的な授業参加を促すために、グループ活動の導入、討論式授業など、多様な学習方法を活用した授業実践も試みられている。

4. 市民性教育教材開発のプロセスと授業研究

上記の教材と授業実践の分析を通じて、モンゴルで現在使用されている教材が、児童生徒に理解しやすく、彼らの関心を引く内容になっていないことが明らかになった。これは、基礎および基本に関する内容を重視した教材が多く、教師がそれを児童生徒に知識として理解させるという面が強く出されていることを意味する。そのため、学習も「知識を得ること」、「理解すること」を中心に進められがちであることが窺える。また、参観した授業例でも、訓戒になる授業が多く、特定の知識を児童生徒に一方的に伝える知識重視型授業であると判断できる。たとえ、知識重視型授業で、児童生徒が道徳的価値に関する新たな知識や概念を教授されたとしても、自らが価値を獲得したり、主体的に思考・判断したりする機会がどれほどあるのかは疑問である。道徳的価値が、知識のレベルで強調されるあまり、児童生徒は教材の登場人物の気持ちを考えるより、教訓話として聞くだけになるケースが多かった。教材面から見ても道徳的な問題を児童生徒の身近な問題として取り上げ、それを高次の実践に結び付けていけるような内容が少なく、児童生徒の善悪判断が単なる知識としての理解に留まってしまいがちになることは明らかになった。児童生徒が教材に関心を持つことができるか、主体的に

授業に参加できるかは、教材そのものによるところが大きいという考え方に立てば、教材の意義と性格について改めて検討することが必要である。したがって、本研究で伝統的な習慣と法律に関する知識を中心内容としている今までの教材と異なり、知識ばかりでなく情緒的関与を重視し、子どもの現実の生活場面を基礎にした新しいタイプの市民性教育で活用する教材開発を目指した。教材開発に当り、日本、韓国、中国の授業実践と教材分析の知見を土台としながら、モンゴルの小学校の「市民性教育の時間」で授業を行い、効果の検証を行いながら、開発を進めた。以下に教材開発と、その教材を活用した授業実践について簡単にまとめる。

(1) 市民性教育用教材開発

目指したコンセプトは、児童生徒自身にとって身近で、基本的な生活習慣の形成に関する概念や生活背景等に配慮し、彼らの興味と関心に対応する内容を含む、新しいタイプの初等教育市民性教育用読み物である。その実現のために、モンゴルの社会系教科にみられる道徳理論・法律・習慣・規範体系に関する一般的知識の教え込みではなく、人間行動や人間関係にかかわる諸問題の解決策を児童生徒に発見させる教材開発を目指した。なお、教材の具体的運用については、市民性教育だけでなく、教科指導や教科外指導など全教育活動において適宜時間を設けて指導過程を柔軟に活用できるものとした。これは、筆者が提案する教材観である。内容については、日本、韓国、中国の市民性教育関連教科の比較研究の結果を踏まえ、教材の内容は、個人としての児童生徒が、自分にとって関心を寄せている馴染みのある社会問題に取り組み、次第に社会における一般的な問題の考察へと進んでいけるように工夫した。従って、教材

のテーマは、互いの見解を尊重し、自由に討論し合うことが大前提である。さらに、導き出された回答は、社会的な課題にも結び付けられ、自分たちには何ができるか、ということを考えさせる内容にした。この教材は児童生徒に社会との繋がりや、様々な価値観、権利や責任について気付かせることが出来るとともに、他者の立場を理解し、その過程で生まれる社会の一員としての素養を体得することができる。それは、まさに市民性教育が目指すところであると筆者が考えている。

読み物資料は感動資料、葛藤資料、批判資料、範例資料などに大別されるが、本研究では児童個々の判断力を問う目的で、家族愛、自尊心、他者尊敬、節度、生命尊重、自主性、労働愛顧、友情、誠実などについて話し合いがしやすい葛藤場面のある資料を試作した。

本研究で市民を「共有できる価値を認め、社会問題を解決し積極的に参画する公共性・社会の担い手」として捉え、「社会を創るための学び」において問題解決力を市民的資質の中核に位置付けた。そして、特に、認知発達理論、価値内面化理論に注目し、モデル校(第3、4、16番学校)において実験的授業で検証しながら、日本や韓国の市民性教育関連教材に学び、調査、発表、討論の場面を提示し、学習や探究の方法を示す、先導的モデルとなる教材を開発した。教材の具体的運用については、学校の創意工夫のより自由に設計ができる「総合的な学習」、「市民性教育」等

の教科外指導など全教育活動において適宜時間を設けて指導過程を柔軟に活用できるものとした。

(2) 市民性教育の授業実践

教科外活動(「市民性教育」や「総合的な学習」)の実施状況からみると、殆どの学校では、この時間を補充授業、復習、掃除、学級の会議に充てているのが現状である。本来の目的が達成されていないのである。その理由として次のことが挙げられる。①教科外活動に関する教師の認識や指導方法が統一されていないこと、②同様な授業の蓄積や経験がないにもかかわらず、教師の手引きや指導の参考になる提案が少ないこと、③割り当てられた授業時間が少ないこと、などである。また、ナショナル・スタンダードにおいて「市民性教育」と「総合的な学習」で「授業で習得した知識を応用できる力」、「自発的学習」が重視されているものの、市民的資質を涵養する場として活用するという面では配慮が不十分である。その点では「知識・理解」、「能力」、「態度・価値」に関する内容項目を関連・統一させた長期を見越しての指導計画に基づき、社会認識を通じて市民的資質を育成している、日本、韓国、中国の市民性教育の指導方法が、モンゴルに多くの示唆を与えている。具体的には、社会生活に関する観察、見学、調査などの学習方法に基づいた、自主的学習、問題解決学習、探究学習などが挙げ



られる。

本研究で実験的授業を通じて資料集をつくるプランを立てた。なぜならば、新しく試作した教材の目的や目標の実現は、教師の教育観や指導力によって制約されることが多いと判断したからである。したがって、モデル校での授業実践が決して単発の授業にならないように市民性教育の授業を確実に展開し、さらに教材の限界を超えて子どもの実情に応じて市民性教育を創意的に推進するために、公開授業とともに授業実践を企画してきた。授業実践で自主教材を用い「参加型授業は果たして成立しているのか」、「教材の構成や操作性、指導方法、さらに市民性教育の授業そのもののあり方」について先生たちと学び合う機会を作るためにウランバートル市スフバートル区教育局と公開授業と授業研究会を定期的に開始し、小中高等学校の先生や各区の教育局の専門家を招き、参加型授業に関する見方・考え方を共有するために、ウランバートル市の第3、第4、第16学校をモデル校に選定し、「市民性教育の時間」において、参加型授業を実践した。授業で以下の指導方法を目指した。

①教材への動機付けを工夫した。資料で取り上げる問題について生徒の自覚を深めるために、教師自身の体験談やクラスの出来事などを取り上げ、より生徒に身近な関心を持つ問題から授業の主題へ結びつけるように心がけた。②他者の立場や心情を考え、共感できるように指導することに焦点を合わせた。資料における登場人物の考えを推測させるために、「主人公はどんな気持ちだったのだろう」、「どんなことを考えたのだろう」、「この場合、自分はどうしただろう」などの発問を設定した。その際に、主人公の気持ちや判断の善悪を問うだけでなく、なぜその行動をとったかというような、判断基準を求めた。

そして、知識だけでなく如何に実践に結びつけるかを考えさせるような指導を試みた。③教材の内容をよく理解させるために写真やイラストや文書などが提示し、授業全過程において、生徒の考えをまとめ、生徒の発言の要点を整理して板書した。④グループワークを中心にし、児童と対等の位置を保ちながら、児童のそれぞれの思いを引き出し、児童同士の話し合いによる知識創造のプロセスを活発化させることをねらいとした。児童同士が意見を交換し、他者と学ぶという過程を通してより良い社会のあり方を考え、経験を共有し、その課程でさまざまな考え方や価値観を持っている児童がそれぞれに交流する中で、互いに尊重し合い共に生きるという意味を考え、結論を導き出すまでの過程を重視した。授業後、児童から「普段、授業であまり皆と討論しない。この授業で自分の意見を自由に言えて、皆といろいろ話し合うことができてよかった」、「皆の意見を聞けば、よりよい解決策を見つけることが分かった」、「他の生徒をみて私も自分の考えをきちんと発表できるようになりたいと思った」、「過ちを起こすことは誰にもある。反省して、よい人になっていたら、その人を許す寛大な心が大事であると思うようになった」、「どんな問題にも解決策があると思った」などの発言があり、相互に学び合う授業になっていることがわかった。

授業実践を通じて「市民性教育とは何のためにあるのか」、「市民性教育で子どもたちに何を学んでほしいのか」、「市民性教育の指導方法とは何か」について、教師らと意見交換をしながら、「学習に対する意欲を如何に引き出すか」、「児童によって見解が異なる多様な価値観をどのように纏め、回答を導き出すか」、「さまざまな権利や価値観、責任について如何に気付かせるか」を中心に議論を重ね

てきた。その結果、明確な構想にもとづく内容の系統性や指導の体系性を実質的にどう確保するのが、最も重要な課題となるという結論に至った。本研究の結果から葛藤場面のある資料が非常に効果的であることがわかった。しかし、2 (2) の指導方法の特徴で示したように、運用する際にはいくつか留意することもあり、授業研究などを通じて現場の教師と研究を進める必要がある。本研究のもと、今後、以下の2点を研究目的として設定している。

(1) 市民性教育のカリキュラム開発

市民性教育は社会科や国語などそれぞれの教科で取り込んでいくことが可能であるが、ここでは特に継続的なプログラムとして市民性教育を取り組むことの出来る総合的な学習等の教科外学習に焦点をあて、アジア諸国における市民性教育のカリキュラム開発の現状と動向について調査し、モンゴルのケースと比較考察する。

(2) 市民性教育の教材と指導方法開発

比較教育学、市民性教育学、総合的な学習の領域で蓄積された多岐に渡る方法を援用しながら市民的資質育成の視点から日本を中心とするアジア諸国の教科外学習の理論と実践（授業構想、授業方法、学習環境等）を研究し、教材開発の方式と展開方法について考察する。

[註]

- 1) モンゴルの学校教育において教育の内容を教育課程上に定めているのは教育スタンダード（日本でいう「学習指導要領」）である。教育スタンダードには、初等中等教育スタンダード（Бага дунд боловсролын стандарт）、高等教育スタンダード（Бүрэн дунд боловсролын стандарт）、特別教育スタンダード（Тусгай хэрэгцээт боловсролын

стандарт 初等中等教育を受けていない人に対する教育の基準を示したスタンダード）がある。教育スタンダードでは、個人の知識および能力の成長をその人の道德、価値観、美的感覚の成長と合わせて評価することの重要性をうたっている。そして、「知識、美的感覚、精神的開発、自己実現力など各生徒の内面的な資質が開発される環境を提供できるように教育環境や教育方法を改革すること」、「児童生徒の道德性の涵養」、「知育、徳育、体育に発展した人間の育成」、「道德性が児童生徒の評価の基盤になること」が強調されている。（モンゴル教育文化科学省『初等中等高等教育スタンダード』Sod-fress 出版、2003年、pp.13-20）

- 2) 自主的で創意的な学習能力の育成を目標とする韓国の「特別活動」、自ら学び自ら考える力や能力の育成を目標とする日本の「総合学習」、生徒の主体性、創造性の発揮を目標とする中国の「特別活動」と類似している部分がある。
- 3) 初等中等教育全体を通じてよき「市民＝国民」を育てることが目標となる。教室で習得した知識を使って、実生活上の課題を見つけ、それを合理的に解決する力をつけるという狙いを持つ市民性教育では、コミュニケーション能力の育成が重要視されている。したがって。子どもの自発性や社会性を育てるばかりではなく学級で取り組む学習や協同作業の中で協調性や自他の人格を尊敬し合う道德的思考を育てることも目標とされている。
- 4) 「教科書」、「資料」、「教材」などの言葉を統一する為に、授業で使われた教科書や資料について、本研究では「教材」という用語を用いる。
- 5) S.Enkhtuvshin 「社会科の授業の内容および教授法の研究」モンゴル国立師範大学教育学研究科修士論文、1999年、p.25
- 6) 哲学、その本質、モンゴルの哲学の価値、地球およびその本質、弁証法、カテゴリー、人間の意識、人間の学習、社会制度、社会の仕組み、経済制度（本質、役割、仕組、開発方法）、社会環境、政治制度（仕組、改革）、社会認識（役割、制度、仕組、改革）
- 7) ①社会現象・人間の生活上の問題、多様な意

- 見を分析し科学的研究方法を活用し、歴史的角度から考察し、自己の意見を主張する能力、②社会問題解決に対する貢献、解決手段を明確にする能力等。③社会政治および経済知識を独学で自発的に高めるために、多様な情報源（本、国および政党による資料、定期刊行物、テレビなど）を活用する能力、④人間、地球、社会を知るために必要な知識を蓄え、社会、政治、経済、文化、人間について資料を作成し、報告・発表し、感想文、批判論文等を書く能力。
- 8) O.Pureb 「21世紀のモンゴルの歴史および社会科教育の理論と方法論」モンゴル国立大学社会学研究科教育学博士論文、2003年、pp.26-28
- 9) 教育開発センター教授法研究所『普通教育学校におけるプログラム』教授法研究所出版、2003年、p.60
- 10) 教育開発センター教授法研究所『普通教育学校におけるプログラム』教授法研究所出版、1995年、p.22
- 11) たとえば、3学年の『私たちの規則』の中で年長者を尊敬する意味について「ボルド君はバスの中でお婆さんに席を譲った。そのバスの中でお金がないと言って怒っている人に対して車掌さんがバスから降りるように勧めていた」という事例が書かれている。この事例に対して「バスの中で起こったことはどちらが習慣で、どちらが規則で決まっているのかについて話し合ってください」と書いてあるだけである。つまり席を譲ることは習慣で決まっているから、バスに乗るときにお金を払うことは規則で決まっているから、という表面的な指導になっている。U.Tuya, M.Narantuya 『私たちの規則』3年生用教科書、Mongol debter 出版、2001年、pp.9-10。そのほか、第4学年の『私たちの権利と義務』で「Cという女の子が無職の父と二人で住んでいる。父は物乞いさせるために娘を学校ではなく市場に毎日行かせている」という事例に対する会話のコメントは「子どもの権利は守れていますか。その理由は何ですか。子どもの権利に関する法律のどの条項に違反しているかについて話し合ってください」になっている。そして、子どもの権利に関する法律の第2条6と8項に規定されている条文を並べて書いてある。U.Tuya, M.Narantuya 『私たちの権利と義務』4年生用教科書、Mongol debter 出版、2001年、pp.14-15
- 12) 「人間と環境」(хүн орчин) (1~3年生)。「人間と環境」は基礎教育課程の改革で6歳児からの入学により新設された教科である。この教科は社会や周りの環境、学校や家庭・社会における生活態度、また人間の行動が人間関係、自然環境、健康にどのような影響を与えるのかについて教授する。これらの内容は、「私たちの見回りの環境」、「私たちの関係」、「私たちの健康」という三つの領域に分けて扱うことにしている。
- 13) 市民性教育に力を入れていると言われている国立複合学校(小中高が一緒になっている)、国立重点学校、法学の学習を重視していると言われている私立学校、一般の国立学校を選定した。
- 14) 「社会性」(иргэншил) (6~9年生)。自分の住んでいる社会、個人として社会および文化活動に積極的に参加する方法、社会関係に関する正しい知識、道徳、法令、権利・義務、行政機関について教授している。従って、①社会についての知識の強化、②社会生活で守るべき法令、社会に参加できる能力、③家庭・社会の中での正しい行動の形成をねらいとし、それを「社会化に関する認識」、「道徳律」、「法令・規則」、「権利・義務」、「政府組織」の五つの領域に分けて扱うことにしている。
- 15) 「人間と社会」(хүн нийгэм) (4~5年生)。低学年における「人間と社会」の教科は体系的な社会化および人道主義教育の基礎である、と言われている。この教科は「私たちの生活と文化の環境」、「法令」、「権利・義務」、「行政機関」について教授している。「私の生活と文化の環境」という領域で自分について家族、親、親戚、友達、隣家、自分の家系、学校、集団、区、市、県、地域の社会、文化、生活、誇りに思う人間、さらに、社会秩序、法令、規則に関する一般的な知識、子どもの権利、義務、地方の行政機関の活動について教授している。
- 16) 「健康」(эрүүл мэнд) (4~11年生)。貧困

家庭や離婚の増大、青少年の非行増加、性モラルの乱れなどの社会的な背景のもと、健全で安全な生活態度や習慣の確立、正しい食事の仕方、栄養指導、性教育などの視点から、1998年から新設された教科である。2004年から健康教育に関する新しいスタンダードが導入され、1年を通じて、他の教科と同様に扱われるようになった。新しい健康教育のスタンダードで健康を身体のみならず精神的と社会的健康という総合的な概念において取り扱っている。この概念が健康教育のもとになっている。従って、その内容は、「健康的な身体」、「健康的な人間関係」、「健康的な環境」という三つの領域から構成されている。

参考文献

- B.Baigalmaa, Ch.Baigalmaa 『健康』小学校2, 3, 4年生用教科書, Ungut heblel 出版, 2004年
- B.Tuya, Ch.Altangerel, G.Shutsetseg 『社会性』6, 7年生用教科書, Urlah erdem 出版, 2006年
- D.Bolorchimeg, Ts.Luvsandorj, B.Delgermaa 『人間の権利』6年生用法律教科書, Sani 出版, 2002年
- D.Dugerjav, B.Dolgor, U.Tuya 『私たちの生活と法律』8年生用法律教科書, Jemr 出版, 2001年
- D.Munkhjargal 『健康』小学校1年生用教科書, Ungut heblel 出版, 2003年
- G.Bayasgalan, D.Dugerjav, U.Tuya 『法律とは何か』5年生用法律教科書, Jemr 出版, 2001年
- G.Sainhishig, G.Narantuya, B.Undarmaa 『人間と社会』4, 5年生用教科書, Soyomb printing 出版, 2006年
- 教育開発センター教授法研究所『普通教育学校における4年生から10年生用の歴史, 道徳, 社会科のプログラム』教授法研究所出版, 1995年
- O.Pureb 「21世紀のモンゴルの歴史および社会科教育の理論と方法論」モンゴル国立大学社会学研究科教育学博士論文, 2003年
- S.Enkhtuvshin 「社会科の授業の内容および教授法の研究」モンゴル国立師範大学教育学研究科修士論文, 1999年
- S.Erdentsetseg, Ch.Batnasan, D.Munkhjargal 『健康』中学校5, 6年生用教科書, Urlah erdem 出版, 2006年
- S.Nyamzagd, O.Purev, G.Saihanhishig 『社会認識』9, 10年生用教科書, Mongol debter 出版, 2002年
- T.Oyun, G.Sodnombaanchig, Ts.Ser-od 『人間と環境』小学校2, 3年生用教科書, Sod-fress 出版, 2005年
- T.Oyun, I.Munkhzul, Ts.Tsermaa 『人間と環境』小学校1年生用教科書, Sod-fress 出版, 2005年
- U.Tuya, Ch.Altangerel, G.Shurentsetseg 『社会性』8, 9年生用教科書, Urlah erdem 出版, 2007年

Research on Civil Education Textbook of Secondary Schools
—On the Basis of Research on Developing Civil Education
Subject for Primary Education in Mongolia—

Bayasgalan Oyuntsetseg*

*Lecturer, National University of Mongolia / The Institute of Humanities and
Social Sciences, Nihon University College of Humanities and Sciences

Abstract

For the purpose of describing/clarifying the current situation of the civil education in Mongolia, this research has examined the features of school subjects related to civil education and social sciences. Accordingly, there has been conducted analysis on teaching methodology for new textbooks based on which currently in use.